

特別支援教育研究論文集

—令和7年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

ミニ校内委員会による通常の学級における支援の検討

— 学年会を活用した学級全体での支援の検討 —

島田市立六合小学校

研究代表 校長 鈴木 浩孝

島田市教育委員会 志村 映莉子

(令和6年度まで六合小学校 教諭)

教諭 曾根 和浩

教諭 上野 ひとみ

教諭 石原 翔太

令和8年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

要旨

本研究は、通常の学級に在籍する多様な教育的ニーズのある児童への支援を充実させるため、学年部単位で短時間かつ具体的に支援策を協議する「ミニ校内委員会」モデルを全校で実践し、その有効性を検証したものである。

今日、通常の学級における特別支援教育の重要性は増しているが、現場では多忙化により、従来の校内委員会が「実態報告」のみで終わってしまい、具体的な指導手だての検討にまで至らないという課題があった。特に本校においては、教員の約6割が経験年数5年以下という状況にあり、個々の教員の経験値やスキルに依存せず、組織的に児童を支える体制の構築が急務となっていた。そこで本研究では、従来の校内委員会のあり方を見直し、「短時間」「具体的」「即時実践」をキーワードとした「ミニ校内委員会」を教育課程の中に位置づけた。

研究の方法として、各学年部において月1回程度の協議の場を設定した。協議ではインシデント・プロセス法を活用し、事例児童の「困り感」の背景を多角的に分析した上で、「明日からの具体的な手だて」を3つ程度選定し、即座に実践に移すサイクルを繰り返した。支援の内容は、SST（ソーシャルスキルトレーニング）の実施、環境の構造化、ICTの活用、そして「頑張りカード」や「ポジティブな価値付け」による心理的支援など多岐にわたった。

実践の結果、第一に、対象となった事例児童に顕著な変容が認められた。感情のコントロールが困難であった児童が自ら冷静に対処法を選択できるようになったり、学習意欲が向上し離席が減少したりするなど、行動面・心理面の両面で肯定的な成果が得られた。第二に、教員の組織的な支援体制が強化された。担任アンケートでは、「一人で抱え込まずに済む安心感」や「自分一人では気づけない視点を得られるメリット」を挙げる声が圧倒的に多く、学年全体で児童を見守る「チーム六小」としての同僚性が醸成された。これは、若手教員が多い本校において、心理的安全性を高め、実践的な指導力を引き出す有効な校内研修の場としても機能したと言える。第三に、個別支援の学級全体への波及効果である。事例児童のために検討された環境整備や言葉掛けの工夫が、結果として学級全体の落ち着きや学びやすさに繋がり、インクルーシブな学級経営の土台となるユニバーサルデザインの視点が全校に浸透した。

考察として、本モデルは多忙な現場においても持続可能な支援検討システムであることを示唆している。協議を「ミニ」化したことで、迅速な意思決定と実践への反映が可能となり、支援の質を向上させた。今後の課題としては、ICTを活用した更なる情報共有の効率化や、客観的なデータに基づく事例児童選定基準の策定、そして支援の継続的なモニタリング体制の整備が挙げられる。

本研究は、校内委員会を単なる形式的な会議から、授業づくりや学級経営をアップデートする「創造的な協議の場」へと転換させる一助となり、多様な子供たちが共に学び育つ学校文化の醸成に寄与するものである。

キーワード：ミニ校内委員会、チームによる支援、インシデント・プロセス法、肯定的価値付け、ユニバーサルデザインの波及